

Hello! FUJISEI

No. 122

「平成24年版 厚生労働白書」では、第1部「社会保障を考える」で少子高齢化によるライフコース（人生の道筋）の変化について解説しています。

平均的なライフスタイルの大正期から現在までの変化を見ると、平均初婚年齢は上昇し、夫婦で出生する子どもの数は減少しています。その間に平均寿命が著しく伸びた結果、夫引退以降の老後の期間も格段に長くなってきています。

1961年（昭和36年）と2009年（平成21年）を比較すると、結婚年齢は上昇傾向にあり、平均的な子どもの数も3名から2名に減少しています。また、結婚しない人、結婚しても子どもを持たない人も増加し、その結果、子育ての手間がかかる幼児期間は11年から8.6年に減少しました。子どもの数は減っていますが、高学歴化により、経済的な扶養を継続する期間が23年から24.6年に伸張するとともに、親の経済的な負担は増加したといえます。

一方で、老後の期間は著しく長くなりました。1961（昭和36）年には、60歳に

ライフコースの多様化

「皆婚」は過去の話 無子割合が増大傾向

達した後の男性の老後期間は12.4年でしたが、2009（平成21）年には65歳に達した後の老後期間が15.8年になりました。夫と死別する妻の年齢が69.2歳（1961年）であれば、その寡婦が独居であったとしても介護等は必要となりにくいですが、79歳（2009年）ともなると、介護等が必要となる可能性が高くなります。

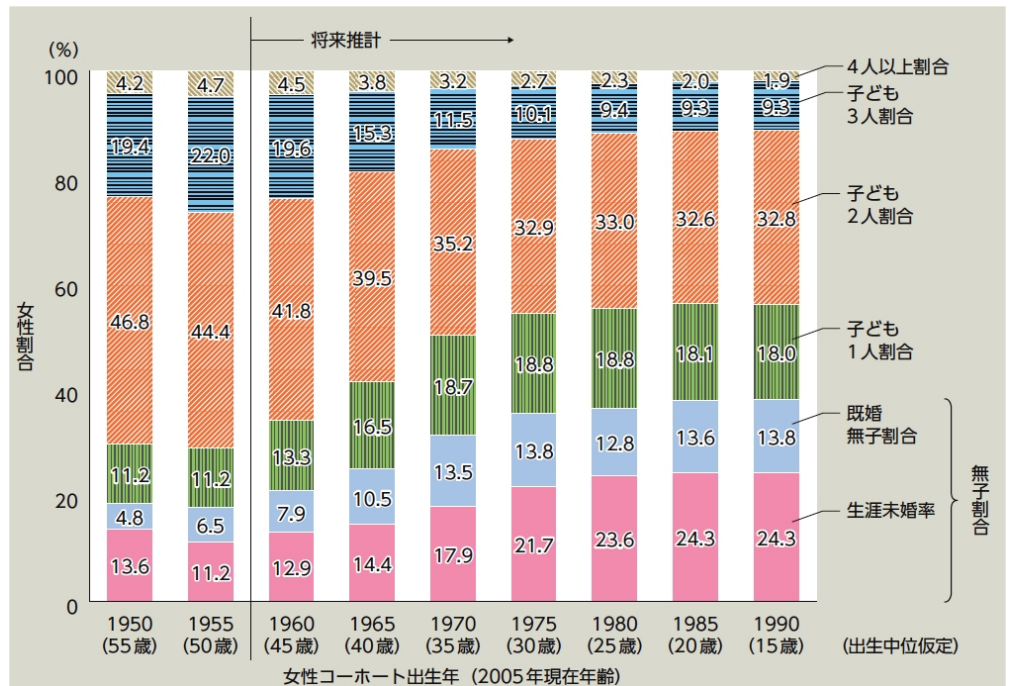
三世同居が減少した現状を考えると、やはり、独居老人のケアへの対応は切実な問題といえます。

価値観も多様化し、人生の選択肢も多くなり、典型的・定型的なライフコースとは違った人生を送る人々

が多くなっています。家族形成の面でいえば、第二次世界大戦後間もない頃は、ほとんどすべての人が一度は結婚し、生涯未婚の人や子どもを持たない人はごく少数という、いわゆる「皆婚」でしたが、今日では生涯未婚の人や生涯子どもを生まない人も増えつつあります。

女性の出生コーホート別（生まれ年別）に見ると、生涯未婚率の上昇によって後の世代ほど無子割合が増大する傾向が見られます。人生の道筋は決まった一本道だけでなく、枝分かれし、人により様々なライフコースをたどるようになっていきます。

コーホート別にみた女性の生涯未婚率ならびに出生子ども数分布



国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2006年12月推計）」